早稲田大学大学院日本語教育研究科

２０２０年７月

博士学位申請論文審査報告書

論文題目：「学習者視点」に基づく「ことばの多様性」の学習に関する研究
—「人称表現」における多様性を対象として—

申請者氏名：任　ジェヒ

主査　小林　ミナ　　署名 小林ミナ
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

副査　小宮　千鶴子　　署名 小宮千鶴子
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

副査　舘岡　洋子　　署名 舘岡洋子
（大学院日本語教育研究科教授/日本語教育学）

＜本論文の概要＞

本論文は，「ことばの多様性」および「ことばの多様性の学習」という課題に対して，日本語教育がいかに取り組むべきかを追究するものである。ここでいう「ことばの多様性」とは，狭義の言語的バリエーションに留まらず，言語選択の背景にある文化や社会における規範，それらに対する価値判断などを含めたものである。また，「ことばの多様性の学習」とは，それらを踏まえた上で，自己の社会参加のあり方を考えられるようになるという，より広範囲の学習を意味している。

上記の前提に立ち，本論文は「日本語学習者が「ことばの多様性」を構築していく上で必要な学習とは何かを明らかにすること」を目的とする。具体的には「学習者視点」に基づき，コミュニケーションにおいて人を呼びかけ，指し示すことによって，ある人物を特定する表現である人称表現について，その多様性がどのように理解・産出されているかを考察するものである。

本論文の研究目的，および，研究課題は，次の通りである。

［研究目的］ことばの多様性を構築していく上で必要な学習は何かを追究する。そのために，「学習者視点」に基づいて，ことばの多様性がどのように産出・理解されているかを明らかにする。具体的には，言語形式そのものが社会文化的コンテクストの捉え方やアイデンティティの指標になり得る「人称表現」を用いて，以下の二つの課題を検証する。

［研究課題Ⅰ］学習者は，コミュニケーションに表れることばの多様性をどのように捉えているのか。

［研究課題Ⅱ］学習者は日常生活のコミュニケーションにおいて，どのようなことばの多様性を，どのように構築しているのか。

本論文は，次のような８章，全 203 ページ（資料などを含む）で構成されている。

第１章 ことばの多様性に注目する学術的・社会的背景と本研究の目的

第２章 バリエーションを巡る先行研究の概観と批判的再考

第３章 人称表現の多様性に注目する学術的背景と先行研究の概観

第４章 本研究の方法

第５章 ［課題Ⅰ］学習者の談話における人称表現の多様性の理解

第６章 ［課題Ⅱ］学習者の言語生活における人称表現の多様性の実態

第７章　［総合考察］学習者視点から構想することばの多様性の学習

第８章 結論と今後の課題

第１章～第３章では，理論的枠組みが示される。

第１章では，本論文における社会的・学術的背景，研究目的，本論文が拠って立つ言語学習観が述べられる。

第２章では，言語的バリエーション，および，それらの学習に関する先行研究について，語用論的能力と社会言語能力に焦点を当てて概観し，本論文における「ことばの多様性」が詳細に示される。

第３章では，「ことばの多様性」を考察するために「人称表現」を取りあげることの学術的背景が検討され，関連する先行研究が示される。

第４章から第６章では，実証的な検討がなされる。

第４章では，本論文で行われた２つの調査の概要が述べられる。［課題Ⅰ］に対しては，BTSJ に収録されている雑談データを用い，５名の協力者（日本国内大学の学部留学生）を対象に，そこにあらわれた人称表現をどのように理解しているかについて，登場人物の相関図を書くとともにその詳細を語ってもらうという方法でデータが収集された（調査Ⅰ）。［課題Ⅱ］に対しては，３名の協力者（日本国内大学の修士課程留学生）を対象に，協力者自身の言語生活の実態を「言語日誌（Language Diary)」と「談話収集」から収集し，そこにあらわれた人称表現についてフォローアップ・インタビューをおこなうという方法で実施された。

第５章では，調査Ⅰの詳細な方法と結果が述べられ，分析される。その結果，学習者が人称表現の多様性を理解する際の困難点について，次の３点が指摘されている。

（1）同一人物に対する複数の人称表現のシフト

（2）引用標識を示す「って(言う)」や引用発話を装う「みたいな」などを伴う引用発話内における人称表現

（3）文脈により多様な意味合いを持つことが可能な人称表現に対する理解の難しさ

この結果を踏まえ，人称表現を理解する際に重要な点として，次の３点が指摘される。

（1）先行文脈から推測可能な話者の視点の移動などを手掛かりに「誰が」「誰の視点

に基づいて」「誰に」「誰のことを」「どのように」という要素を連動させること

(2) 話し手，聞き手，話題人物という従来の捉え方に引用発話内における三者関係という捉え方を加え，二重視点からアプローチすること

(3) 省略された一部の要素の復元や意味の推測などは，学習者自身の言語生活における自他のことばに対する振り返りによって可能になることを理解すること

第6章では，調査Ⅱの詳細な方法と結果が述べられ，分析される。その結果，学習者が人称表現の多様性を構築する際の観点として，次の5点が指摘されている。

(1) コミュニケーションを行う目的

(2) コミュニケーションを行うコミュニティの特徴

(3) コミュニティにおいて創造されることばのジェンダー指標性

(4) フェイス侵害度を考慮した人間関係における安全性

(5) 話し手，聞き手，話題人物を捉える視点の多様性

その上で，以上のような観点を支えているのは言語資源の多様性であり，学習者が言語資源のどこに注目し，どのように活用するかには種々のあり様があり，背後には，ことばの学びをどのように捉えるかという学習者独自の視点が形成されていることが論じられる。

第7章は，これまでに得られた知見に基づいて，総合的な考察が行われる。そこでは，「学習者視点」に基づくことにより，「ことばの多様性」の学習について，「意味」「使用環境」「人」という3つの示唆が得られることが論じられる。

第8章では，本論文の結論とそれが示唆すること，また，今後の課題が述べられる。

本論文の「ことばの多様性を構築していく上で必要な学習は何か」という問いに対する結論は，次の通りである。

学習者自身が言語実践のプロセスの中で，継続的に自他のことばを観察し，ことばの多様性に気付くこと，そして，多様な意味合いを振り返り，言語化すること。さらには，そのプロセスの繰り返しによって，自分自身はことばの多様性とどのように向き合っていくか，ことばの多様性に対する自分自身の価値観を構築していくこと。

そして，この結論が示唆することが次の4点にまとめられている。

(1) ことばの多様性の学習を主体的な学習と位置付けたこと

(2) ことばの多様性の学習を継続性のあるプロセスの学習として位置付けたこと

(3) ことばの多様性と規範に対して新しいアプローチをしたこと

(4) ことばの多様性を追究するための新たな調査を取り入れたこと

今後の課題としては，既存のコーパスデータを利用したことによる限界があげられ，本論文の課題により即した性質のデータに基づく研究の必要性が述べられている。また，本論文の結論に基づく継続的な教育実践の必要性が述べられている。

＜本論文の評価＞

本論文の評価できる点は次の通りである。

(1) 論文にとって重要な概念である「ことばの多様性」や「人称表現」について，それらに関連する先行研究を幅広く精査した上で，日本語教育研究に即した定義を定めて慎重に考察を進めたこと。

(2) 言語学的な「バリエーション」の枠組みを乗り越え，より広範に「ことばの多様性」をとらえ，また，規範と逸脱という二項対立から脱却し，位置づけることを試みたこと。

(3) 理論部分を構築する先行研究の検討と自然談話を対象とする調査がバランスよく記述され，論文全体としてまとまった構成となっていること。

(4) 自然談話における「人称表現の多様性」に対する日本語学習者の理解と表現の実態を丁寧に記述し，それらに基づいて「人称表現の多様性」の学習に必要な要素を導き出し，総合的な考察を行ったこと。

(5) コーパスデータの解釈，登場人物の相関図作成，言語日誌への記録，雑談資料の提供，フォローアップインタビューという質の異なる５種類のデータを用いることにより，学習者の頭の中を立体的に解釈することを目指したこと。

(6) 学習者の視点を重視して，学習者の学習プロセスを主体的かつ動態的なものととらえたこと。また，その視点から調査を行ったこと。

これらの点から，本論文の成果は，今後の語彙教育の改善に大きく貢献すると考える。

ただし，以下のような課題がある。

(1) 自然談話における人称表現の理解に関する調査が，調査協力者が資料を外側から観察する形で行われ，かつ，文字化資料を見ながら音声を聞き人間関係図を作成して人称表現のさす人物を推測するという，通常の談話理解とは異なる形で行われているにも関わらず，そのことがデータの質にもたらす点に言及がな

いこと。

(2) 人称表現の使用に関する調査結果からは，日本語学習者が人称表現に関する知識や自らの価値観などをもとに，属するコミュニティにおける日本語母語話者の使用なども参照しつつ人称表現を使う実態が観察された。しかし，それが今後の日本語学習者の人称表現学習に与える意味に関する考察は，十分とはいえないこと。

(3) 人称表現の意味や使用について本論文で得られた知見が，狭義の日本語研究や人称表限研究にもたらす示唆について言及がないこと。

(4) 人称表現の「ことばの多様性の学習」を１つの事例として調査研究を行ったが，この研究が人称表現以外のさまざまな「ことばの多様性の学習」にどう生かされるかに関する考察が十分ではないこと。

(5) 教育実践の場でどのように生かすことができるかは視点の提示にとどまり，具体的な提案がないこと。

＜本論文の判定＞

以上のような課題はあるものの，本論文は優れた学術研究として高く評価することができる。よって，本論文をもって日本語教育学の博士学位論文に値するものと判断する。